浜田市議会議長　原田義則様

議員名　澁　谷　幹　雄　㊞

調　査　研　究　活　動　報　告　書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1．期　　間　　平成２７年5月１１日（月）～5月１２日(火)

2．視察先と内容

① 安芸高田市　　川根振興協議会の取組みについて
「行政に頼らないコミュニティづくり」
講師　　辻駒健二会長

② 門前湯治村　　神楽ドーム視察
(安芸高田市)　　説明　　山根孝浩安芸高田市政策企画課まちづくり支援係長

③ 邑南町　　誰もが幸せになれるまちー攻めと守りの定住プロジェクト
「Ａ級グルメ構想と日本一の子育て村構想について」
講師　　石橋良治邑南町長
田村哲邑南町定住促進課課長補佐
口羽正彦商工観光課課長補佐

3．参加者　　原田義則　牛尾博美　西田清久　道下文男　飛野弘二
上野茂　　野藤薫　　串崎利行　澁谷幹雄

4．調査経費　　１２，７５３　円

5．調査研究活動の概要　　別紙

浜田市議会 受付 27.5.15

安芸高田市

川根振興協議会の取組みについて

- １９７２年の江の川の氾濫→自分たちがどう生きるか？
  どう変わるか？
- ２１９８人が５００人に→危機感による住民自治意識の芽生え
- 農業が基幹産業―農地を守る
- 道路整備の遅れ→同じように税金を納めているのに、何故自分たちに帰ってこないのか？　……自分たちが選んだ市長や議員のせい？
- 小学校の統合→学校がなくなると、地域の夢を語れなくなる
- １９８２年、「農地を守る会」の立ち上げ→土地改良へ－８０ha を５年で
  ⇔今から、負担金を出してまで土地に金をかけて何になる
  ⇔わしのところから、先にやってくれ
  →補助金の１８００万円は個人に配らず、法人の運営資金に－独裁者と言われた
  →個人のエゴに任せたら、何にもできない
- 地域のご縁のおかげ
- 親の世話のために、３８年前に戻ってきた
- 行政のやれることには、限度がある→行政がやることと、地域がやることの仕分け
- 道路改良―各自が１ｍ５０cm 提供
- 草刈、道路管理は自分たちがする
- 学校を、４億円かけて改修→「川根ミュージアム」
- 地域住民の声を行政がいかに取り入れるか
  →要求から提案のまちづくりへ
- 若者定住の住宅建設へ→２３戸建設
- 学校を無くさないという決意が必要
- 支所に権限と予算がないので、
  合併したことの難しさがある
- 就労の若者農業者→野菜果物栽培の本には、
  草が生えることが書いてない！

川根エコミュージアムのホールで、
辻駒会長から、説明を受ける

- ガソリンスタンドとストアの撤退→一戸千円(２６０戸)集めて再開
- 各戸毎に、「一日一円募金」実施―給食サービス
  →予想以上に資金が集まる
- 「もやい便」－どこからでも片道５００円
- 毎朝カーテンを開ける－元気なサイン→地域の人たちが顔を覗かせる
- 香典返し→振興会へ・宴会部長が必要
- 住民自治意識は高齢者の方が高い→みんなでお金を出す

所感

川根振興協議会の成功事例を考えると、リーダーの存在もさることながら、行政にオンブするだけでなく、自分たちでも「一日一円募金」やガソリン給油所やお店を再開するのに、積極的に資金を出すなど能動的であることが、特徴であるという気がした。ともすれば、行政にアレもコレもしてくれと、オネダリしがちだが、協議会の中で、自分たちがすることと、行政にお願いすることを仕分けする点は、画期的である。これが、おそらく、住民自治のスタートラインであり、地域の自立に繋がっていくのではなか、と感じた。地域の繋がりを大事にするという、強い意志があって、出色。どうすれば、自分たちの地域で実践できるか、考えて行きたい。

門前湯治村視察(安芸高田市)

- 門前湯治村総事業費４０億円
- 神楽ドーム建設費８億円
  委託費一年間４０００万円
  金土日年間１５０日神楽上演
  チケット収入→社中と管理会社とで折半
  入場者一日平均５００人

所感

神楽殿のあり方として、こういうお金をかけないドーム形式の舞台もありなのか、と思ったが、鉄骨の大きな柱があって、建設費８億円と聞いて驚いた。浜田にも、村芝居や神楽が見れる施設があってもいい、と思うが、果たしてどういう形が、一番適しているのか？　両方使えるものがいいように、私は思うのだが……。

テント張りの神楽ドーム
前側畳敷き―２畳の桟敷席に変化
後列椅子席

門前湯治村の敷地内で、説明を聞く

門前湯治村入り口で記念撮影

（カメラマン澁谷）

邑南町

誰もが幸せになれるまち－攻めと守りの定住プロジェクト
「Ａ級グルメ構想と日本一の子育て村構想について」

石橋町長から説明を受ける

邑南町石橋良治町長

- 邑南町の人口－１１５００人、面積－４２０平方キロ、世帯数―５０００世帯、高齢化率　―４１．９％、島根県中央部で盆地の多い地形
- 一般会計の予算規模１３０億円－交付税５０％以上、教育費１１億円―毎年増やしている
- まちづくりの基本理念→住民が主役―まちづくり基本条例の制定
  周辺を大切に―２１６集落、３９自治会、自治会担当職員配置
- 自立を促す→公民館設置・職員３人体制(正規職員１名)－地域に出かけて行く
- 合併後の一体感→ケーブルテレビの活用―加入率９６％
- 若手職員による地域のカルテづくり－地域の課題と人口分析
- 出羽地域の取組み→「出羽夢づくりプラン」策定―「日々の生活は足りているが、足りないのは希望」との声を受けて→課題の解決と夢の実現に向けて―「ＬＬＣ出羽」法人設立
  地域通貨と人材バンク(農地保全・除雪作業・空き家対策)
- 町民の生活満足度調査―８４％が満足(全国平均６４％)子育て支援充実・学校教育充実・高齢者障害者福祉充実・下水道普及率９１％・食べ物おいしい８５％
- 人口減少の右肩下がりを緩やかにする←９００自治体２０４５年には消える
  ２０１５年の推計値１１，０３１人⇔現実は、１１，４８７人
- 邑南町の人口動態―社会動態Ｈ２５年＋２０人、Ｈ２６年＋１３人　(浜田マイナス３２６人)
- 攻めのＡ級グルメ構想と守りの日本一の子育て村、徹底した移住者ケア
- 町民に誇りを持ってもらうことが大事
- 今いる人も大切に「誰もが主役」・・・日本一の子育て村構想へ
  ０～１８歳人口の増加と定住→Ｈ３３年の目標１８００人(１００人増)
  邑南町は、過疎債をソフト事業に充当できるように陳情
  →特別枠分１億８千２百万円全額消化する必要がある
  →過疎ソフトで思い切った戦略を―関係課召集
  →保育料の無料化と「日本一の母子保健事業」－中学生までの医療費無料

- 身近で安心な医療体制の構築→公立邑智病院―医師１０人体制、２４時間緊急受付
  産婦人科、小児科機能の充実、専門医の常勤、ドクターヘリ
- 待機児童ゼロ、９ヶ所の保育所は統合しない
  →園児４人でも、園長、保育士、調理師の体制維持
- 過疎債を使って、一般財源の支出を振替え
- 日本一子育て村基金→１０年後にツケをまわさないために積み立てを行う
- 日本一の子育てむらを目指すにあたり、町民が一丸となって子育てに対する取り組みを進めて行くことが大事→地域で子育て未来を創る→みんなが笑顔で暮らせるまち
  行政無線で赤ちゃんの誕生をみんなに知らせる
- 地域おこし協力隊３１人→耕すシェフ、アグリ女子隊、地域クリエーター、アクサホ隊
- 数値目標設置―定住人口２００人確保→２１３人、観光入込客数１００万人→９２万人、食と農の５名の起業家→２７人に
- 食の学校―調理学校との連携
- 保育料２子目から無料、保育所完全給食、病児保育、園長保育
- 公民館の充実・地域学校・奨学金制度・笑顔キラキラ事業
- 定住支援コーディネーター(職員男女２名)→Ｕ｜ターン者ケア
- 「都市から地方へ」を継続・強化する―農林業の活性化が重要
- Ａ級の町をめざして→新たな就業スタイルの創造
- 今後の課題
  町内に食と農を中心とした起業支援センターを設立
  民間企業との協働によるさらなる邑南町のブランド力アップ
  一流の人材の育成→世のため、人のために役立つ人材の育成
  新たな就業スタイルの創造
- １００年先でも持続可能な町へ→理想郷に向けて
- 町全体が一つの家族としてサポート

所感

邑南町の政策は、極めて体系的である。

中心に、まちづくり基本条例があって、その下に、総合振興計画があり、そこから、課題の分析がなされて、政策が立案されている。人口減少に対して、社会動態の人口増をもたらした手法は、瞠目に値し、浜田も大いに参考にすべきと感じたところである。

一方私は、以前から「邑南町」という町の名前に違和感があった。合併によって、「瑞穂」「石見」「羽須美」の地域エゴによって名前が絞り込めず、邑智郡の南にあるから、というような理由で、この名前がつけられたのだろうぐらいに想像していた。これまでの文化と歴史を冒涜するような名前ではないか！　ちょうどお隣の由緒正しき川本高校が、「島根中央高校」というわけのわからない名前に変わったように、この地域の人たちは、言葉に対するセンスや歴史文化を尊重するという精神が希薄なのだろうと感じていたのだ。

しかしながら、石橋良治町長が進めている「邑南町」のまちづくりの話には、極めて感銘を受けた。

私は、まちづくりとは、文化であり、何よりも必要なのは、まちづくりに対するフィロソフィー、哲学であって、当然のことながら、トップリーダーにその明確な認識と意思があるかどうかが重要だと考えている。そういった意味において、石橋町長には、自分の作りたいまちの将来のヴィジョンが明確だ、と感じたところだ、

幹部職員の「衆知」を結集し、政策を積み上げていく手法や、２０代～３０代の職員をとにかく鍛えようとする姿勢や、人数が減っても保育園や学校を減らさないという強い意志や、柔和な語り口の中に発想の煌きがうかがわれ、自分たちの実力を理解した上で、国や県の力を引き出す手法や、今後の人口減少と過疎化に悩む地方自治体の議員にとって、示唆に富んだ啓示が多く隠されていたところだ。

久しぶりに、すぐれたリーダーの話に、大いなる刺激を受けた。